

豊島区をこよなく愛する男

「銀ちゃん」通りを歩けばそこかしこから声がかかる、地域の人気者。常に誰かに囲まれていて、老若男女問わず人を惹きつける魅力が彼にはある。とはいえ、小学校時代は学級崩壊を経験、中学の頃はややグレしてもいた。そんな彼を地域の人たちは時に厳しく、時に温かく見守り続けた。「自分を育ててくれた地元に戻りたいんです！」その思いが彼の原動力。

生まれも育ちも豊島区

4人兄弟の末っ子で、姉2人に兄1人。年の近い姉とは割とよく喧嘩もしたが、それでも自分より5つ上。一番上の姉とは11も離れている。だから兄弟たちからは可愛がられて育った。母親はずっと働いていたので、小学生の時は祖母が巣鴨駅近くでやっていた寿司屋に入り浸っていた。あの頃は特にボランティアに興味はなく、サッカー選手になりたかった。でも地域のお祭りには両親の影響でよく参加していた。父親はずっと巣鴨だけで母親は元々岩手の人。祖母が昔から地域で活動していたので、母親もそのつながりを引き

浦本 銀河さん



1 今を語る 2 保育園での祭 3 歴史パレード 4 阿波踊り 5 大学の友人と地元の神輿を担いで

継いだんじゃないかな。祖母のことは一番好きだった。「あんたはずっと笑っていないよ」と言われ続けたっけ。だから好きな言葉は「一笑懸命」。「笑」という漢字を使うのがポイント。ちなみに大切にしていることは「友人、人との関わり」で、一番尊敬している人は中学時代のバスケット部のコーチ。たまに愛のムチも飛んできたけど、オンとオフの切り替えがきっちりしていて、しっかき怒ってくれた。20代だったけど、年長の教師にも阿ることもなく正しいと思うことを主張できる人だった。そのコーチがいつも言っていたのが「感謝の気持ちを忘れるな」。この教えがあったから、今素直に照れなく「ありがとう」と言える。

### ボランティアを続ける理由

最初のボランティア体験は中学生の時。職業体験で近くの福祉作業所へ行った。いつも前を通っていたなんとなく気にはなっていた場所だ。その時は偏見もあった。変な人たちがいると

ころだと思っていた。でも実際に体験してみても意識が180度変わった。向こうからガンガン話しかけてくるし、明るいし、馬鹿にしている人の方がバカなんだと思うようになった。

高校では特にコレっていう大きなボランティア活動はしなかったけど、母親の地域でのつながりを利用していろいろな行事に参加した。方々から声がかかり過ぎて大変な時もあったし、なにより同級生がいないのが辛かった。もっと若い人たちを誘ってよ！とも思っていた。それでも参加し続けたのは、断って誘われなくなったら困るし、参加し続けたら何か見つかるかもしれないと思っただけ。でも一番の理由はやっぱり楽しいからかな。

本格的にボランティアを始めたのは大学に入学した後。不純な動機で始めた活動はやったらハマった。大学時代を通して行ったボランティアや地域活動で出来た繋がりは、友人からうらやましがられたほどで、地域で頑張り続

けた成果だと思っ。

ボランティアを続ける理由は、若い人が地域に入るのはキツイということを知っているから。ベテランが若い人を呼ぶより、若い人が若い人を呼ぶ方が断然入りやすい。なので自分が先に入って、入りやすい雰囲気をつくりたいと思った。だから声をかけた友人が地域のイベントに参加して、「楽しかった、また行きたい」と言ってくれた時は本当に嬉しい。やっていたことを分かってもらえた瞬間だ。

### 豊島区への思い

中学2年生の時、「命」という題材で作文を書いて区長賞をもらった。豊島公会堂で発表した時みんな泣いてくれて、「頑張れよー」と言ってくれた。ああ、いい人たちだなあってしみじみ感じた。その後で参加した地元のお祭りでも、「良かったよー」と何人も声をかけてくれて、それで自分はちょっと変わったと思う。

大学では社会福祉学科を専攻した。

就職先は豊島区じゃないけど、一度地元を離れている学び、現場を知ってから戻ってくるつもり。そして施設と地域の人を結び付けたい。それから若い人が住みやすい町にしたい。若い人の居場所が一番少ないと思う。だから居場所を作りたい。ある地域の区民ミーティングで「区長になりませう！」と宣誓したことがある。なぜそう思ったかというと、自分の意見をバンバン！と言えるようになりたいから。動かないと話を聞いてもらえないというのは経験から分かっているし。

豊島区は良い町です。23区で一番良い区だと思っ。まず人が良い。池袋や巣鴨といった全国的にメジャーな地区もあるのに、豊島区自体の知名度は意外と低い。もっと人に入って来て欲しいとか細かい希望はいろいろあるけど、この町はこのままでいいと思っところもある。つまるところ自分は今の豊島区が好きなんです。

ボランティアを続ける理由は、若い人が地域に入るのはキツイということを知っているから



食<sup>く</sup>べる事<sup>こと</sup>の大切<sup>たいせつ</sup>さ、家庭<sup>けいたい</sup>の味<sup>あじ</sup>をあなたに

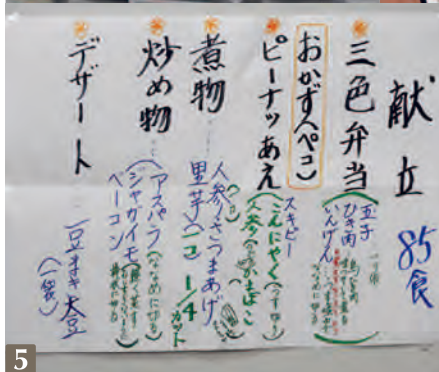
# 松本 淑子<sup>まつもと よしこ</sup>さん(老人食を考える会代表)

昭和48年から地域で一人暮らしをしている高齢者への食事作りを始めている松本淑子さん。その活動は43年という長い期間におよぶ。

94歳の松本さんは、現役のボランティアとして老人食を考える会の代表を務め、今も元気はつらつと活動している。

## 老人食を考える会の誕生

1923年(大正12年)、東京府麻布区(現在の港区麻生)生まれ。両親共に教師の家庭で育った。結婚後の昭和22年に池袋に居を構える。子育てをしながら、子どもの問題に興味を持ち1969年(昭和44年)に社会事業学校に入学する。卒業後にカウンセリングを学び、大学教授や様々な方との人脈ができた。その後、いのちの電話相談員、民間企業数社での相談員、社会事業学校の同窓生と「泉の会」の立ち上げに関わる。泉の会では、板橋区でのリサイクルルームと西武デパートでの相談会を行った。泉の会での活動と共に、老人食を考える会を立ち上げる。その経緯を尋ねると、「区役所の担当課



1 当時を振り返り楽しそうに話す松本さん 2 丹念にお弁当を作ってます 3 利用者さんとの交流 4 老人食を考える会の皆さん  
5 本日の献立 6 お弁当の一例 7 長い活動の歴史

長から『高齢者が困っているから何とか高齢者の集う場を作ってくれないか』と話がありまして『何かと言ってもそんな事簡単にできませんよ』と言ったら、『お茶とお菓子出すだけでいいよ』っていうんだけど『お茶とお菓子出すだけでもお金がかかるんです』って言ったら、予算をとってもらいまして……』と話してくれた。

### 食事の大切さ

現在、94歳となる松本さんは「高齢者に限った事ではないですが、食事って大事なんですよ」と話す。その背景には、地域に住む高齢者への深い思いがあった。「一人暮らしで困ることは体調が悪くなった時。本人は食事の支度をしなくちゃと思っても、できない現状がある。老人食を考える会の対象と言える方は、自分の事が出来なくなるギリギリの方。身体が弱っている時に手を差し伸べる事が大事だと考えています。なので、当時は会食が終わってから何軒か自宅までお弁当を届けていたんです」。老人食を考える会では食事は会食形式での提供をしていたが、参加者の増加と会場に來られない方の為に昭和62年から配食を始めた。

### 昔と今の活動

第1回目の開催は南大塚の社会教育会館（現 南大塚地域文化創造館）に行っていたが、参加者は3名であった。

## 高齢者に限った事ではないですが、食事って大事なんですよ

「その時に、食事以外にもゲーム等のレクリエーションを行い楽しい時間にしたのよ」と、昔を振り返りながら楽しそうに話した。老人食を考える会の活動は、現在多くある高齢者サロンの走りとなる活動であった。会食時間は15時までと決まっていたが、居心地が良かったのか参加者によっては夕方までいる方もいたようである。高齢者にとって安心できる場であった事が分かる。

食材の調達には、「昔はリュックを背負って、朝早くから3人で築地の市場に買い出しに行っていました。初めはお店の人も怪訝な顔をしていたけれど、活動内容を理解してもらい食材を安く提供してくれるようになったんです。時には、食事にウナギも出したことがあって、皆さん我先にと席を取っていたんですよ」と笑顔で話してくれた。当時の会の活動は、利用者が多かった為に地域ごとに拠点を設け一拠点の負担増を避けようと考えていた。活動拠点は、南大塚・駒込・西池袋・千早の四地区だった。当時から、その活動

に対して地域からの期待が大きかった事がよく分かる。

現在では、区内在住の65歳以上の一人暮らしの方で、ご自身でお弁当を取りに来られる方を対象とし、午後の1〜2時間の間に來てもらっている。現在は約80名の方が登録されていて、来てくださった方と日常の事や生活の事など会話しながら手渡しをしている。ここで友人が出來たと喜んでいる方もいる。

### 地域に住む高齢者への思い

その活動のやりがいは、無事にお弁当が完成した時に隙間なくおかずが入り色合いも華やかになった時にとってもホッとすること。また、取りに來られる方の笑顔を見る事と、利用者からのダイレクトな反応も活動の醍醐味だと感じている。

その為、献立については「参加者のリクエストに応えつつ栄養バランスや彩りも工夫している」と松本さんは話す。高齢者にとって食事は、楽しみのひとつであり、どう美味しく食べても

らうかを日々考えてお弁当を手作りしている。

およそ半世紀にわたり、相談事業や食事作りなど先駆的に福祉活動を実践してきた松本さん。長い間、会が続いている事からも、地域に住む高齢者から老人食を考える会への期待とその役割は大きい。ボランティアの高齢化などの問題は残るが、未永く会が続き地域の高齢者への元気の源であり続ける事を願うばかりである。

### Data

団体名	老人食を考える会
日時	毎月第1・3木曜日 9時~14時
場所	みらい館大明（池袋3-30-8）にて実施予定 詳細は、お問い合わせ下さい
対象	区内在住の65歳以上の一人暮らしの方で、ご自身でお弁当を取りに來られる方
活動内容	地域の高齢者に対し、手作り弁当を手渡ししている
連絡先	03-3971-9911（松本）



きつかけは小さな男の子でした

皆川 美香さん

皆川さんには3人の子どもの中に脳性麻痺を持つ怜大君がいる。

障がいが残るといふ事実を知った時、どんな未来が待っているのか想像できなかったという。

他の姉弟には負担をかけたくないと日々葛藤する中、手を差し伸べてくれた人達と共に怜大君を中心とした優しさの輪を広げる活動をしています。

ハートピースとの出会い

双子を妊娠中、片方に障がいがある可能性について診断を受けていた。

怜大と名付けたその子は、将来的に肢体不自由児の学校へ行くことになるかと告げられた。

生後5ヶ月頃から病院のリハビリ訓練や療育センターへ通い始めたが、訓練は月に数回だけだった。自宅で出来ることはないかと探した時、個々の障がい合った訓練プログラムを作成するNPOハートピースに出会った。

心の壁

ハートピースは家族だけで障がい児を抱えずに、ボランティアとつながることで周囲の人間や家族自身が持つ「心



1 みんなにとってやさしい環境をつくっていきたい 2 機能訓練の様子 3 みんななかよしスノードロップ楽団 4 みんなが楽しみにしている秋の芋煮会 5 怜大君の笑顔最高!

の壁」を取り除き、障がいがある人もない人も共に生きていける場所をつくることを方針として掲げている。怜大君の訓練もボランティアを募ることが条件だった。

その頃、怜大君と外出する際に受ける周囲からの視線は耐え難いほど辛いもので、周りの人は全部敵だと感じていた。本当にボランティアとして協力してくれる人がいるのか。不安の中ボランティアを募るチラシを配るため街を歩いたという。

初めてチラシを貼ってもらった眼科でのこと。チラシを見た受付の女性が「私に何かできることはありませんか」と声をかけてくれた。第1号のボランティアだった。

初めは人に頼ることに躊躇していたが、相談すると快く引き受け、背中を押してくれた仲間がいた。怜大君が2歳の時、仲間と共に怜大君を支えるボランティア団体「スノードロップ」を結成。協力者が増えていった。

「最初はもっと自分が頑張らなきゃと思ってた。しかし、ハートピエーの先輩ママから『母親が頑張るのではない。地域の中に怜大君のお父さんやお母さんを増やし、周りの人に育ててもらうことが大事』と教えてもらった」。

皆川さんは、自身が頑張りすぎると怜大君と地域の人のつながりを邪魔

## 地域とつながることで、障がい児を生んだとしても、 親亡き後を不安に思わない社会になったらいい

してしまうことに気づいた。その後、身を引くことの大切さを学び、任せることにした。

その後、ママ友達の協力で怜大君は保育園へ入園。小学校は皆川さんが付き添い、中学校は特別支援学級の先生の協力により、公立の学校に通うことが出来た。いくつかの障壁があり簡単な道のりではなかったが、一緒に過ごすことで、他の子どもどもの社会の中で苦労していることを知った。

そして、辛い経験や寂しい思いをしている子が怜大君の周りに自然と集まっていることに気づき、怜大君の存在で救われる子がいることを知った。これが怜大君の役割だと思った。

### 地域とつながるために

怜大君はもうすぐ高校を卒業する。小さい時から多くのボランティアとの関わりがあったため、言葉がなくてもコミュニケーションが取れるようになり、たくさん笑う明るい子に育った。

「様々な人と関わった経験から、他の姉弟も親亡き後を不安に思っています

ん。障がい者を特別支援学校や施設に入れると、障がいを持たない人とお互いを理解する機会が奪われ、社会との壁が出来てしまう。大勢で少数を、地域のみならず障がい者も高齢者もみる事が出来た方が、辛いことも何分の1になる。簡単ではないが、そうした方が楽であり、実はみんなが幸せになる道だということ。地域とつながること

で、障がい児を生んだとしても親亡き後を不安に思わない社会になったらいいかと考えています」

今後の夢について、皆川さんは次のように語った。

「スノードロップで積み上げてきた事を地域の中で活かしたい。その1つが『怜大の家』。怜大君がいることで出来る輪、つながり、癒し、その力を活かしていける場をつくりたい」、「怜大にとってやさしい環境は、みんなにとってやさしい環境。様々な境遇に置かれている人の居場所になるように、地域の中で助け合える場をつくっていきたいと思っています」

現在、スノードロップは機能訓練以外に吹奏楽団としての慰問活動、誰でも参加できるスポーツイベント「スマイル☆カップ」、秋には「芋煮会」を開催している。

障がいを持って生まれた一人の男子のまわりに多くの人が集まり、自然と優しさの輪ができて広がっていく。助けたつもりが助けられていたことに気づく。これが怜大君のまわりで実際に起きてきたことである。皆川さんとスノードロップの活動を多くの人に知って欲しい。このような輪がどこにでも見られる社会になることを願って。

### Data

団体名	スノードロップ
日時	随時
場所	長崎4-47-16
内容	機能回復訓練のサポート等
対象	どなたでも
参加	事前連絡必要
連絡先	03-3958-5189 (皆川)



想いを共有し、つどう場所

臨済宗妙心寺派 萬年山 勝林寺

窪田くぼた

充栄じゅうえいさん

勝林寺は、ソメイヨシノの発祥の地、染井（現駒込）の片隅の閑静な住宅街の中に佇んでいる。モダンな木造建築のそのお寺は木の温もりに包まれ、訪れる人を穏やかに包み、迎えてくれる。元和元年（西暦1615年）臨済宗の寺院として創建された禅寺である勝林寺は、江戸時代から400年続く歴史あるお寺であり、田沼意次の菩提寺でもある。総木造のお寺に目を惹きつけられていると、玄関先で作業衣姿の住職・窪田さんが出迎えてくれた。

未来へつなぐお寺

お寺は、2017年末に建て替え工事が完了した。この生まれ変わった総木造のお寺には住職の未来へつなぐ想いがたくさん詰まっている。住職の人生の中で大きな転機となったのが東日本大震災だという。ボランティアに行ったときに、お寺が地域の人々の支えになっている姿を目にし、お寺の未来を感じたという。お寺には救済物資が集まり、避難所となったり、祈りの場として存在していた。お寺には、人を包み込み、ホッとさせてくれる場の



1 住職・窪田さん 2 「子どもは怪獣!」子ども用車いすのタグ 3 節分の鬼のお面作成 4 親子の語り場 5 移動水族館 タッチプールの様子

力がある。「勝林寺をこういう場所にしたらかった」その時、思ったことは、今後、勝林寺は地域の拠点になるだろうかということ。現代は、葬式仏教と言われるように「死」を介してしかお坊さんに会わない時代。寺は敷居が高く別世界になってしまっている。「人が来やすい場所にしたらかった。わたしのお寺と感じてもらえるように」。「生」ある人のお付き合いは寺にとって大切なこと。住職は、「人と暮らしの間にあるお寺」を目指し、設計はそうした「場づくり」を実践されている建築家、手塚建築研究所の手塚貴晴・由比氏にお願いすることにした。勝林寺の永い歴史と未来への営みを見据え、建て替えへの負担が減る木造建築にした。「次世代にどうバトンを渡すか。次にどうつなげていくか」木造建築は寺の未来を思う住職の強い想いからであった。

時代は、毎日、代官山へ通う学生だったそう。日本文化を映した総木造のモダンな本堂や、デザイン性の高い勝林寺のパンフレットから納得である。

**「神も仏もない」そう感じた日々**

住職には2人のお子さんがいる。2013年に生まれた、むっちゃんは肢体不自由の障がいがある。この年、上の子も発達障がいを抱えていることが分かり、とても大きなショックを受けたという。寺の建築と父の葬儀も重なり壮絶な日々だった。寺という家系に生まれながら、この時、様々なことが重なり、心が辛くなり「日々の祈りとは何なのか。なぜ自分ばかりが…神も仏もないのか…」と考えてしまったという。むっちゃんが生まれた瞬間から、看護生活が始まった。

一番つらかったのは、公園を歩くこと。鼻に管を通したむっちゃんへの視線がどうしても気になってしまった。また公園には、手をつないで歩いたり、ボール投げをする親子がいて、それを見るのが本当に辛かったという。「なぜ、うちは普通の子育てができないのか…」健常の子どもを見るだけでも落ち込んでしまった。

**場をつくるということ**

就学前の障がい児の親たちは日々の看護もあり、なかなかつながりを持ってない。SNSが広がった現代、文字でつながることはできてもやはり対面に勝るものはないという。「安心して気持ち共有できる場所を作りたい」住職は、障がい児を抱えた家族を対象として2か月に1回、訪問看護師にも来てもらう気持ちで共有できる場として「くつろぎば」を開催している。遠方から来る家族も多い。「障がい児の親は常に不安を抱えている。会って、話す。しゃべるだけで大分、楽になる」お父さんとお母さんのストレス発散になればと願っている。「グリーフ (Grief)、喪失感とは忘れるものではなく、抱えやすくしながら生きていけるようにすること」お寺という場の力を活かし、障が

いがあるお子さんのご家族に寄り添う、これが勝林寺の目指すグリーフケアである。

今まで、勝林寺では、葛西臨海公園の移動水族館を利用したり、どんなお子さんでもできる七五三法要を行い、なかなか出かけられない障がい児の家族たちに喜んでもらってきた。他にもプロのカメラマンに家族写真を撮ってもらう機会を設けたりした。このような住職の粋な計らいは、「子どもに喜んでもらうのはもちろんだが、親が喜んでくれる。お父さんやお母さんが笑顔じゃないと子どもは笑顔になれない」という想いからである。

また寺では、坐禅、仏教彫刻、ヨガ、味噌づくりなど寺の特性を活かしたワークショップを行っている。みんなに必要とされている寺でありつづけるために寺ができること。さまざまなお会いと集いを生み出しながら、「人と暮らしの間にあるお寺」として、地域と共に歩んでいく。

## グリーフ (grief)、喪失感とは忘れるものではなく、

抱えやすくしながら生きていけるようにすること



多様性を認めあい、大家族のような地域をつくる

# RYOZANPARK OTSUKA & SUGAMO

竹沢 徳剛さん

豊島区巣鴨生まれ、豊島区巣鴨育ち。

株式会社「MAN」を創設し、2012年4月に生まれ育った巣鴨にフィットネスジム付のシェアハウス RYOZANPARK 巣鴨をオープンする。その後大塚にシェアオフィス RYOZANPARK 大塚を立ち上げ、そこには弁護士、公認会計士など、土業からデザイナーなど様々な職業の人間が集まっている。フリーアドレス型オフィスや個室、子育てしながら仕事ができる「こそだてビレッジ」などを開設。ここでは単なる仕事の間から大きくはみ出して「いることそのものが価値となる」存在を目指している。

みんなでシェアするからつらさは半減

大きな身体と全身からみなぎるエネルギー、「筋はうそをつかない」が口癖の竹沢さんは、初対面では強烈なインパクトを受ける。「うまい肉を手に入れたら、1人で食べずに、みんなでシェアすること」を信条としている。これは一人でおいしいものを食べても楽しくない。みんなで食べるから楽しくな



1 竹沢徳剛さんとご家族 2 RYOZANPARK 大塚 meeting room 3 こそだてビレッジ 4 フリーアドレス オフィス 5 RYOZANPARK 巣鴨 会食風景

る。逆につらいこと、悲しいこともみんなでシェアすることで半減すると考えているからだ。そんな竹沢さんのルーツはどこにあるのだろうか。

竹沢さんは中央大学法学部政治学科を卒業後に単身渡米し、ワシントンD.C.のアメリカン大学大学院で国際法を学ぶ。学部の学生時代には北海道のヨサコイソーラン祭りの創始者である長谷川岳氏に出会い、住民から政治家まで様々な人々の対応を一手に引き受けている姿から、氏のような懐の深い男になりたいと思い始める。その後の大学院時代はアメリカ大統領選のボランティア等に尽力、大学院卒業後は法律事務所や日本語の情報誌の運営・記者などに携わる。

事業創設のきっかけは2011年3月11日にさかのぼる。東日本大震災が起き、当時アメリカにいた竹沢さんはCNNから放送され続ける津波に押し流される東北の人々と町の映像を見て、まるで自分の身体が溶けだすような感

覚を体験し、涙があふれたという。当時のことを振り返り、「国の対応の遅さに愕然となった。特に福島原発報道を見て日本という国に危機意識を持った。」と語る。いてもたってもいられなくなり、アメリカの友人や日本からの留学生に現地の状況を説明し、義援金を募る団体を設立するなど、被災地支援に携わる。

そこでの様々な人とのかわりの中で、震災で疲弊した日本を再び元気にする力ぎは、アメリカのように日本社会がもっと多様性を認めていくことなのだと感じく。どんなバックグラウンドの人でも、日本が好きで日本で何かチャレンジしたいと思う人々が、社会から家族の一員のように受け入れられることが大切だ。そんな懐の深い社会を作り出したいと思うようになった。

#### 多様性を認め合うコミュニティ

そこで、まずは生まれ育った地域で、日本人だけでなく世界中からやってくる若者たち、志をもった起業家のため

の環境を用意した。それが「RYOZANPARK集鴨」である。名前の由来は中国の古典「水滸伝」に登場する英雄たちが集まる要塞、梁山泊である。梁山泊はアンチガバメントの集団で、自分たちのことは自分たちでやっていくことを信条としていた。半径5mの人を幸せにできなければ、いくら国や社会を幸せにするといっても説得力がない。だからこそ、たとえどんなに小さくても、少しずつ熱い思いを持った仲間が集まり、それを受け入れる多様性を認めるコミュニティがあれば、川の流れのように社会や国を変革し、良くしていく動きにつながると竹沢さんは考えている。

そんな竹沢さんが運営するRYOZANPARKには国籍、職種を問わず様々な人が集まり、生活し、働いている。中にはそこで出会って結婚したカップルや、ほかの住人に影響されて働いていた会社を辞め転職をした人など、RYOZANPARKでしか実現できな

いようなつながりができているようだ。そんな住人たちに竹沢さんは「俺たちは60、70になっても、一緒に酒を酌み交わして、切磋琢磨し合える仲間であるんだからな」と話している。もはや竹沢さんにとってRYOZANPARKの住人との関係は家族そのものなのである。

RYOZANPARK集鴨には、竹沢さんのご両親も生活している。ご両親は若者との交流が増え、住民からは東京のお父さん、お母さんと親しまれている。最近では、住人と銀座に飲みに行き、フィットネスジムで鍛えた筋肉をほかの住人と自慢しあうような、粋なおじいちゃん、おばあちゃんになっている。その両親の変化を見て、多世代間、多国籍間でのシェアハウス運営に手ごたえを感じ、やってよかったという気持ちになったという。

今後も活躍が期待される竹沢さんから、目が離せない。

半径5mの人を幸せにできなければ、いくら国や社会を幸せにするといっても説得力がない



# 歴史MAP委員会

区民ミーティングとは、地域の人が地域で気になることを話す会である。その中からはじまったのが歴史MAP委員会。「地域に関心を持ってもらいたい」ということから池袋の歴史を載せたマップの製作をすることになる。地域のまち歩きからはじまり、その後地図に何を載せるべきかメンバーで話し合い、昨年の10月に歴史マップが完成した。マップには、国の指定文化財になっている自由学園明日館、立教大学、旧江戸川乱歩邸などを記載した。

今回インタビューでお話いただいたのは歴史MAP委員会メンバーである上り屋敷町会の執行大輔さん、西池袋南町会の小野礼子さん、グラフィックデザイナーでマップのデザインを考えてくれた若原勝政さんである。今回の取り組みについて語ってもらった。

## 歴史マップを作るきっかけ

まずはなぜ、歴史マップを作ろうと考えたか話を伺った。「はっきりいって若い人たちは歴史を知らないですからね。私は、町会やっているから良くなるんだけど、すごく若い夫婦が増え



1 1月20日に行われた歴史マップイベント 2 イベント後の反省会「やっと形になったね。」 3 歴史MAP委員会メンバー 4 歴史マップとスタンプカード 5 イベントはどんな感じにしようかな

ているんですよ。そういう人たちは外から来ているから、まったくこのまちを知らない。その人たちに歴史を知ってもらって、より身近にこのまちを感じてもらいたいと思っています。このまちにいてよかったです。豊島区に住んでよかったですと思ってもらいたい」と執行さん。「2013年でマップを作り、まちを歩いてみて、いっぱい発見がありましたね。地域のことを知ってもらいたいということでも歴史マップを作ったのですが、対象をどの人にするかといったときに、とにかく新しい人が多くなったので、じゃあその人達を対象としようか、となったんです」と小野さん。

池袋に古くから住んでいる人は、新しい住民が多くなったと感じるようである。このことから今回作った歴史マップを地域の子どもたちに伝えたいと話がでたのではないだろうか。また、若原さんは他に感じる点があるように、「私は唯一外からきた人間なんです。この辺に来たのは20年くらい前なんです。

す。こんなに文化、歴史のあるまちに今まで住んだことがない。著名な方もたくさんいる」と話す。文化と歴史のある豊島区を発信していきたいという思いが、取り組みのきっかけになっている。

### 子どもたちへ歴史を伝える

地域の思いをのせて歴史MAP委員会が発足したのは、平成26年。最初は、地域を知るためにまち歩きからはじまった。その後、マップに何を載せるか検討し、マップに載せる9つの名所、旧跡を決めた。デザイナーの若原さんの協力を仰ぎながら昨年の10月に完成。完成した後、歴史MAP委員会メンバーから「せっかく良いものができたので、子どもたちに池袋の歴史を知ってもらおう企画を行いたい」という意見が出て校長先生の協力のもと、池袋第三小学校の3、4年生向けにイベントを開催することとなった。イベントの内容は、地図に記載してある情報をスライドで流し、昔の写真と今の写真を

対比させながらクイズも交え、池袋の歴史について話をした。中には親子で来てくれている人もいた。イベントの中では地図には記載はないが、「池袋第三小学校の今と昔」という項目を増やし、昔の池袋第三小学校の写真をスライドで流した。その写真の中で、今も変わっていない池袋第三小学校の映像とともに校歌が流れると、ほのかに子どもたちが校歌に合わせて歌い出して参加者全員、胸をうたれる場面もあった。製作してきた歴史マップが形になり、長く歴史マップ製作に携わっていたメンバーからは、「全体的に子どもへの反応が良く、校歌を歌ってくれたところは感動した。やってよかった」、「解説をしてくれた執行さんの説明が良かったし、クイズを出題してくれた斎藤さんのアレンジも良かった」と話があった。子どもたちや、歴史MAP委員会メンバーも、楽しんでくれたようでイベントは大成りに終わった。

### 変わらない歴史を語り継いでほしい

今後についても、イベントに参加した校長先生から、小学校3年生の授業でも取り上げたいとの話があった。また、高齢の人にも昔を懐かしんでもらえたり、外国人も歴史にも興味があるのではないかと、この話もでている。いずれにしても今後も活動は継続していく予定である。

この何年かで池袋は、変わったと思う人も多いのではないだろうか。新しい住民も増え、新しい建物も増えた。ただ変わらないものもあると思う。それは、「歴史と文化」である。この歴史マップが家族の中の話題として出てくることを、マップをつくった歴史MAP委員会メンバーは望んでいる。そして子どもたちにも住んでいる地域に興味を持ってもらい、池袋の歴史を未来に語り継いでほしい。

このまちにいてよかった、豊島区に住んでよかったと思ってもらいたい



まちのつながり

6人兄弟の次男として生まれ、豊島区巢鴨でずっと暮らしている。

戦時中の昭和12年12月に生まれ、現在80歳。一度は栃木に疎開したが、終戦後に巢鴨に戻りすくすくと成長した。商業高校を卒業後、知人の会社の事務に就職。その後実家に入り板金業を継いだ。26歳の時に現在の奥様と結婚。2人の子どもを夫婦2人3脚で育て上げる。40歳の時に、当時の町会長の推薦により育成委員として地域デビューを果たす。その後は育成委員会長、PTA副会長などを経て、現在は町会長とNPO法人区民ひろば清和の理事長を兼任、40年以上巢鴨の地域をやさしく見守っている。

変わりゆく巢鴨の街並み

「巢鴨で生まれてずっとここで暮らしているよ。」昨年80歳を迎えた照内さんは語る。板金業を生業としている家庭で6人兄弟の次男として生まれた照内さんは、巢鴨のにぎやかな街並みの中で育ち、現在もこの地で暮らしている。長年にわたり巢鴨に住んでいると、巢鴨の地域は時代と共に大きく変化して

照内 義雄さん



1 インタビューに応じる照内さん 2 月2回は通う鎌倉でパジャリ 3 区民ひろば清和職員と照内さん  
4 町会を挙げての清掃活動 5 子どもの為にもちつきをする照内さん

いるとおもうことがあるという。

現在は「おばあちゃん原宿」として全国的に有名な巣鴨は、4の日や土日祝日を中心に、毎日老若男女、国籍問わず、多くの観光客が訪れている。それに対して、昔の巣鴨は現在とは別物の活気があった。当時の巣鴨は車通りが少なく、子どもが道端でベーゴマやメンコで遊んでいる光景が日常であり、地域住民同士顔見知りだからその活気があったという。また地蔵通り商店街には、個人商店が多く、何かあったときには助け合うような、住民同士の顔の見える関係ができていた。

近年は交通面の発達、地蔵通り商店街の観光地化、貸店舗の増加、外国人観光客の増加など様々な要因により、昔ながらの人情味あふれた地域よりも観光地としての色が強くなった。こうした地域の変化は住民にも変化を与えている。アジア系を中心とした外国人向けシェアハウスが増えて、外国籍の住民が増えてきているのだ。グローバ

ル化が進んでいる巣鴨の地域。昔から巣鴨に住んでいる照内さんのような住民にとっては巣鴨の変化は手に取るようにわかるのだろう。

### 育成委員から始まった地域での関わり

「40歳くらいかな。当時の町会長から推薦されて青少年育成委員会に入ったのがきっかけかな。」

責任感の強い性格の照内さんは、育成委員の仕事に真面目に取り組み、気が付いてみれば地域とのかかわりは40年以上続いている。当時より、どんな人に対しても物おしせず遠慮しない性格を買われ、育成委員としてコツコツと実績を積み上げていた照内さんは、地域になくはならない存在となった。育成委員から地域活動が始まったため、子どもに対しての気かけには人一倍熱意をもって取り組んでいて、地蔵通り商店街で道行く親子と話している姿は、町の名物となっている。そんな照内さんだからこそ、地域や仲間からの信頼は厚く、現在は町会長と区民ひろ

ば清和の理事長を兼任し地域の顔として活躍し続けている。

子どもだけではなく、近年増えている高齢者の問題にも意欲を持って取り組んでいる。巣鴨の地域に高齢者も多く、特に社会から孤立している高齢者の増加には照内さんも危機感を持っているようだ。特に家族が遠方に住んでいるなどの背景を持つ高齢者が多く、支えていくためには地域の力が必要不可欠である。しかし、最終的には家族の存在がどうしても必要となるので、しっかりと声を上げていくことが肝心であると語る。照内さんは子どもと同じ居をしているが、実際に何かあったときには心強く感じているからこそ、そのように思うようだ。

### 次世代に託したい思い

「今の若者は自分の為に生きていくことが第一だと思っつよ。」

昔と今とは働き方が大きく変わり、現代の社会人は自分自身に余裕がなく仕事に追われている状態だ。まずは自

分のために一生懸命になり、「ごく普通の生活」を成立させることが大切であると照内氏は主張する。立場上、働き盛り世帯の町会参加に頭を悩ますことが多いが、照内さんは今の若者にしっかりとした考え方がないと心から信じている。こう思うのは、照内さんが育て上げてきた自慢の子どもたちが照内さんの意思を継いで、各方面で活躍しているからである。社会の移り変わり、家族の移り変わりはあれども、地域をやさしく見守る照内さんならではの言葉である。

照内さんは現在80歳。区民ひろばの理事長や町会長を続けているが、そろそろ次の世代にバトンを渡したいところである。しかし、退任しても体が動く限り地域に貢献出来たらと考えているようだ。

## 巣鴨で生まれてずっとここで暮らしているよ